

韓人共産主義運動の特質



李 命 英
(成均館大学 教授)

I.

韓民族に、共産主義思想が入ってきたのは、1920年代の初めであった。時あたかも、3・1運動の挫折により、韓民族が、落胆と虚脱感に陥っていた時である。貧富の差をなくすという主張も魅力があったが、弱小民族の解放というスローガンは、より一層魅力的であった。これにより、多くの独立運動家がモスクワへ視線を向け始めた。

独立運動家として、一番最初に、共産主義と手をつないだ人は李東輝である。かれは、既に、1918年、露領ハバロフスクにおいて、韓人社会党という、アジア地域最初の共産主義政党をつくった。しかし、かれは、共産主義理論をまともに理解し得るような共産主義者ではなかった。にもかかわらず、かれは、レーニン政府の「弱小民族解放」のスローガンに魅せられ、ソ連による援助と独立を得んものと、共産主義の旗じるしを高く掲げたのであった。ソ連の援助を充分に得るためには、それだけ、共産主義運動を大いに展開しなければならない。それで、かれは、中国の上海において、大韓民国臨時政府の國務総理の座にありながら、片方では、高麗共産党を造りもしたのである。1921年1月、上海において発足した高麗共産党は、モスクワよりもらった工作金により、韓国内と満洲の韓民族社会へ、宣伝と組織を浸透させただけでなく、中国と台湾、そして、日本の共産主義者たちまでも支援したのである。

ここでしばらく、アジア各国の共産党が創設された時期を比較して見ると次の通りである。中国共産党は1921年7月である。日本共産党が組織されたのは1922年、そしてインドシナに南洋共産党が組織されたのは1925年である。インドは1926年である。韓人たちの共産主義運動が、海外にて展開されつつ、それが、遂に、国内において、組織の根をおろすようになったのは、後述する通り、1925年4月、ソウルで発足することになる朝鮮共産党である。

韓人独立運動家たちは、第1次世界大戦後開かれた、二つの会議、即ち、パリ会議とワシントン会議に、敏感な期待を寄せた。それは、言うまでもなく、ウィルソン大統領の民族自決の原則

が、如何に適用されるかに対する期待によるのであった。殊に、ワシントン会議は、太平洋問題を取りあげるとして、関心がより大きかった。ところが、全ては虚しかった。韓国の独立は言うに及ばず、韓国に対するいささかの関心も表明されなかったのである。この時、ちょうど、レーニン政府は、極東労働者大会を召集した。1922年1月、モスクワで開催されたこの大会に参加した韓人は全部で52名にのぼり、中国、日本、蒙古、インドなどの国の代表団よりも大部隊の代表団であった。

後日、民族主義者として、また、共産主義者としても有名になった人たちが入り混っていたこの代表団の規模は、モスクワに対する韓人たちの、高い関心振りを端的に物語ってくれる。

事実、亡命独立運動家たちに、暖い同情のまなざしを与え、同志的紐帯のもてなしを施してくれる者は、当然、レーニン政府しかなかった。旅費を与え、宿泊と食事を提供するにとどまらず、運動資金までも与えた。モスクワ万歳を叫びたくなったであろうかれらの心情が理解できる。そうこうしている中に、共産主義の波は、徐々に、しかし、着実に浸透しはじめたことは言うまでもない。しかし、一方では、少なからぬ独立運動家たちが、レーニン政府に失望し、背をむけはじめた。その最初のきっかけは、1921年6月に発生した、あの有名な、「自由市惨案」である。

シベリアの自由市に集結した韓人武装兵力が、赤軍によって、多数が殺害されたこの事件は、韓人たちを驚愕させた。「弱小民族解放」を支援するとの赤軍が、祖国の独立のため闘おうとする弱小民族の軍人たちを、ハエを殺すように、一挙に惨殺するとは、韓人独立運動家たちはソ連という国を見直さずにはいられなかった。その上、事態は、泣き面に蜂と化した。シベリアに出兵中の日本軍が、1922年10月、全軍撤兵するや、その時まで、赤軍といっしょに、日本軍と、決死的に闘ってきた韓人独立軍が、レーニン政府によって、全て、武装解除されたのである。必要な時には、独立を支援するとの約束をエサに、欲しだけ利用し、急場をしのごと、今度は、自分の領土の中で独立運動をしてはならないとして、武装解除をしたのである。このような裏返しの共産党を、これ以上いかに信じられよう、ということで、独立運動家たちは、みんな、歯ざりしたのであった。このような経緯から、韓人たちの間には、「アメリカをあてにするな、ソ連にそむかれるなれ」という格言まで生まれたのであった。

II.

ソ連という共産国家の出現に期待を掛けたがそむかれた韓人独立運動家のうち、その代表的人物が李東輝である。レーニンが直接会って、揮手し鼓舞してやり、おだてあげ、工作金をくれてやったその李東輝を、ソ連は、結局、いかに待遇したのであったか。民族的偏向(祖国の独立に窮極的

目的を置き、共産革命には窮極的目的を置かないことに対する非難を、共産党はこのように言う)が強いとの理由で、結局は、いかなる活動も不可能なようにしたのであった。伝説の抗日英雄金日成將軍(本名金光瑞 1911年日本陸士卒)の場合も、また同様であった。1千余名の独立軍をひき、赤軍といっしょに闘ったかれは、武装解除を避けるため、部隊をソ・満国境に移動、屯田兵制を実施しながら、引き続き独立運動を模索したのであるが、ソ連の背信のために、最後まで、志を全うし得なかったのである。結局、ソ連の目的は、弱小民族の独立にあったのではなく、「社会主義祖国」という名の下に、ソ連を「祖国」としてあがめることを条件とする、各国に対する、共産革命がその目的であったのである。

初期の独立運動家たちが、頼るところすら全くない、そして、冷厳な国際政治の中で、わずかの拠り所として、一縷の希望を托し、モスクワを仰ぎ見たのであった。ところが、非常に恥ずかしい挫折を味わい、背を向けてからも、依然として、ソ連と共産主義に対する魅力を忘れることのできない一団の韓人たちがあったことはもちろんである。これらによって、慎重に運ばれた足跡に雨水が溜まり、その雨水がすぐ小川となって歴史の小流を成し、その小流は、また、程なくして、歴史の江となって、1925年4月、遂に、ソウルにおいて、朝鮮共産党の組織を見るに至ったのである。

この時から、国の内外の韓人社会に、共産主義運動がどんどん成長し始めた。

韓人共産主義運動の特徴は、初めから、理論を十分に消化し得ないまま、ひたすら闘争のスローガンと行動の方針だけで、共産主義を受け入れた点である。従って、性急に、実践運動を先立てた。この、充ち溢れる行動主義は、左傾冒険主義盲動路線という誤ちを生むに適していた。貧富の差の原因を、専ら「搾取による私有財産制度」へ帰着させ、亡国の原因を帝国主義に、帝国主義の原因を資本主義へと単純化させた。従って、独立の成就と公平な社会の建設は、ひたすら資本主義制度の打倒にあるとした。この、暗示と断定に充ちた主張の前で、共産主義運動は、目を追って、行動力を増して行ったのである。この運動には、二つの原則があった。一つは、無慈悲な「暴力闘争」であり、もう一つは、プロレタリア国際主義のための「祖国ソ連邦の鞏固とした擁護」であった。これを守らない者は「反動分子」「帝国主義のスパイ」「ブルジョア民族主義者」であったのである。

共産主義者たちは、共産主義を支持しない人間を、無条件に、敵に仕立て、無慈悲なる暴力闘争の対象とした。その最も代表的な事件が、1930年1月に発生した、民族主義独立運動の巨将金佐鎮將軍に対する共産主義者たちの暗殺であった。この事件は北満の中東線鉄道の山市站という所で起きた。韓族の抗日武力闘争の歴史において、金字塔の戦勝記録をたてた、1920年10月19日から22日にわたる、東満の和竜原青山里における、日本帝国主義軍隊との一大血戦で、指揮総司令であった金佐鎮將軍を、共産主義者たちは、ただ、主義が異なるという一つの理由のために、敢て殺害したのであった。

さらに身の毛のよだつような事件は、同年(1930年)、東満の延吉県銅仏寺というところで発生した殺父会事件である。270名の父親たちが、一晩のうちに命を失った事件である。青年たちが革命を行うと密議しながら群歩くのが危険であると、父親たちが、心配のあまり、鎮静をうながしたとして、親たちを反動として追い込み殺父会を組織したのである。そして、無慈悲な革命的気概を見せるとか言って、互いに親を替えて担当し、一晩のうちに270人を殺害したのであった。

世界の共産主義運動史上、このような極左的暴行は、それまでなかった。共産主義者たちは民族主義独立運動家たちを「封建的反動分子」に、「ブルジョアの代弁者」に、そして、「帝国主義の手先」に追い込み、打倒の対象にしたのである。従って、民族主義者たちは、また、共産主義者たちを「赤色帝国主義の手先」、他国(ソ連)を祖国と呼ぶ「民族反逆者」に、そして、自由を抑圧する「圧制主義者」に追い込み、打倒の対象としたのであった。

かくして、共産主義者と民族主義者は「階級革命至上」対「民族解放至上」、「無産者国際主義至上」対「民族国家独立至上」というはっきりした二つの陣営に分かれ、最後まで妥協に至らなかった。民族主義者たちの総本山の大韓民国臨時政府の「民族解放至上」「国家独立至上」の路線はこのようなして形成されたのである。民族主義者や共産主義者が等しく、抗日闘争を掲げながら、このように、基本的理念と路線の違いにより、協同戦線を築き得なかったばかりでなく、互いに敵対関係にまで至ったと言う、この歴史的事実のなかで、われわれは、1945年の国土分断の民族内的要因を探ることができるのである。ただ、米・ソ両国の相反する戦略的利害のためだけに、国土分断の悲劇があったのではなく、韓民族自体の内部が先に分裂していたのである。

Ⅲ.

理論的研さんが不足すれば実践行動も軽率なものである。1925年4月に結成された朝鮮共産党が、わずか3年の間に、4回の大検挙にあい、組織が壊滅的打撃を受けたのは、日帝警察の恐るべき能力だけが問題であったのではなく、韓人たちの軽率な行動にも問題があった。理論武装の不備からくるこのような体質的欠陥は、コミンテルンが朝鮮共産党の承認を取消し、その再組織を指図した1928年12月のテーゼ以降の、党再建工作においても如実に現われたのであった。12月テーゼ自体が、韓国の実情に暗い、それこそ、公式に僱った指令文であったのであり、それでも、韓人共産主義者たちはそのコミンテルンのテーゼを尊重するだけで、自らのテーゼを生産することは知らなかったのであった。その結果として、そしてまた、日帝の増加する弾圧の結果として、党再建のための数々の試図とねばり強い苦闘にもかかわらず、8・15解放の時まで、党再建は成されなかったのである。

しかし、コミンテルンの指令通りに、労働者、農民のなかに、党の基盤を構築せんとする地下工作としての赤色労働組合、赤色農民組合運動の根は大変ねばり強くかつ深かった。

また、学生たちに対する浸透宣伝教育運動も大変執拗だった。その不屈の運動過程において、数多くの人たちが投獄されたが、なかには獄死した者もあり、解放後、やっと、出獄した者もあった。かれらと呼んで、国内派共産主義者と号するが、金銀珠、朴憲永、呉琪燮、朱寧河、李康国、金三龍、李舟河、李承緯、許成沢等々がその代表的面々である。これらのうち、金銀珠(1892年生まれ)は平壤に行かず、現在も故郷の全羅北道扶安に住んでおり、金三龍や李舟河は南緯で処刑され、残りは平壤政権に参加したが、全て、粛清により、非業の死を遂げた。

1928年の12月テーゼにより、ソウルの中央党を失った朝鮮共産党満州総局関係韓人共産主義者たちは、一國一党の原則により、中国共産党に入党することとなった。中共党は、朝鮮共産党員たちを入党させるにあたって、個別審査と革命的党性の発揮という二つの前提を提示した。こうして発生したのが、1930年5月30日の間島暴動事件である。中共党中央の李立三路線に副い、この暴動に飛び込んだ韓人たちは、大変な勇敢さを発揮したのであったが、集団自殺に近い程の犠牲者を出し、おまけに、コミンテルンからは極左盲動という恥辱的批判を受けた。それでも、国を失った労働移民としての在満韓人農民たちは、その二重の劣悪な生活条件が、共産主義運動の基盤として適していたがため、多数の新顔の韓人たちが、中共党満州省委員会傘下の各級の組織に加担した。こうして朝鮮共産党の組織は、満州から消え去り、以来満州には、韓人たち自らの組織や運動は、永遠になくなる事となった。

1930年は、満州において、韓人共産主義運動が、中国共産党に吸収された年であっただけでなく、その運動の性格が、本来の極左盲動性がより一層、目に見えて、高度に発揮された点で、記録に残るべき年でもあった。先にも言及した、5・30間島暴動事件や銅仏寺における殺父会事件のほかにも、至るところで殺人的蛮行が、革命の美名のもとに敢行されたのであったが、そのうちの一つに吉黒農民同盟事件というものがある。1930年の秋、吉林省懷徳県五家子一帯の韓人農村を舞台にして起きた、いわゆる、反動分子に対する打殺・絞殺事件である。これには、今日の北韓の金日成が18歳の若さで、主犯の一人として関係したという重要な事実がある。

韓人共産主義者たちが、中共党に吸収されたのちにも、その極左盲動性は変らなかつた。1932年5月30日に発生した、満洲の磐石県における、韓人男女53人に対する大虐殺事件がその代表的ケースになるだろう。これは中共党南滿特委磐石県委員会が起こした事件である。この組織は、普通、磐石共産党と呼ばれたが、幹部や党員のほとんどが韓人であった。それで、かれらは、2年前に韓人たちが起こした間島暴動事件記念日を期して、ふだん、かれらの指図をないがしろにしていた韓人たちに対する報復的肅清事業として、虐殺を敢行したのであった。この事件に関する記録を紐解いて見ると、その人面鬼心的蛮行に身の毛がよだつ。共産革命という名分だけ掲げれば、如何なる事でも美化されるものと思っていた、当時の風潮がよく表われている。反革命分子として著名であ

った青年をしばっておき、党の名で、死刑を宣告、その青年の夫人に、共産主義に賛成しなければいっしょに殺すと威し、その女性が生きるために、共産主義支持と答えたところ、支持の表示として、夫の目の前で、共産党員との肉体関係を強要する等の蛮行までも行った事件である。

1931年9月、日本が、武力で満州を占領、翌年、カウライ満州国を建てるや、中国人たちの反満抗日武力闘争が方々で起きた。その中で、1933年9月から、中共党の武装部隊の東北人民革命軍も続々組織されて行った。多数の韓人共産主義者たちもこれに参加した。プロレタリア革命の前には、民族とか国境は有り得ないと信じた韓人たちであったが、中国共産主義者たちは違っていた。それで発生したのが、1935年初頭の、東満の東北人民革命軍の根拠地を血で洗った民生団事件である。韓人たちは、ただ、韓人であるということだけで、日本の手先の民生団員に見られ、4百余人という多数の人たちが血の粛清にあったのである。1936年、東北人民革命軍は、東北抗日連軍に改称され、その第1路軍は東南満を、第2路軍は東北満を、そして、第3路軍は北満を遊撃区としたが、総兵力は、最も盛んであった時が2千余名程度であった。かれらは、山岳地帯の密林の中を移動しながら、補給のため、無差別な掠奪、殺人、拉ちをほしのままにする以外手がなかった。あげくの果に、かれらは、民衆の敵に転落したのであった。この時、この東北抗日連軍の中で、韓人として、一番多くの事件を起こして有名になった人物は、第1路軍第2軍第6師団長の金日成であった。かれは、1937年6月4日の夜、咸鏡南道甲山郡普天堡を襲撃した人物である。かれは1937年11月13日に戦死した。かれの戦死と共に、そのあとを継いだものが、金日成という名前まで継承し、第1路軍第2方面軍長となって、数々の事件を引き起こすが、1940年末、ソ連へ渡り、解放前に、そこで死亡した(北韓の金日成は、主にこの二人の金日成の経歴を、美化、変造して、自分のものとしている)。

1940年末、東北抗日連軍が総崩れになり、3百余名が残ってソ連に逃亡した時その中には韓人たちも百名位いた。これらは、ソ連によって再訓練され、中には諜報活動のため、再び満州に派遣され、逮捕されもした。

8・15解放を迎え、ソ連軍が、かれらを北韓に連れてきた時、その数は60~70人程度であった。これらを称して、東北抗日連軍系共産主義者というが、現在も、北韓を統治している金日成(本名金聖柱、東北抗日連軍当時の名は金一星)をはじめ、崔庸健、金策、崔賢、金一、姜健、朴成哲等が代表的面々である。これらの中、崔庸健は病死、金策は6・25動乱の時謀殺された。1982年の崔賢の死も謀殺説が有力であり、姜健は6・25当時戦死、金一は1984年3月死亡した。朴成哲だけが、今も、金日成の傍にいる。

韓人共産主義運動のもう一つの脈流は、1940年代前半に、中国華北において、その根が育った。1930年代中葉において、国民政府管轄地域のあちこちで抗日戦線に加担していた韓人共産主義者たちは、30年代末から、華北の延安にあった中共党の韓人幹部たちと連絡をとりながらその地に集結し始めた。かれらは、中共党支援下の、抗日戦線参加を熱望したのであった。

1941年1月、かれらは延安で、華北朝鮮青年連合会を発足させ、翌年7月には、これを朝鮮独立同盟と朝鮮義勇軍に発展させた。その総数は3百人内外であった。

朝鮮独立同盟は、華北の諸方へ組織網をひろげ、韓人たちの糾合に尽力した。朝鮮義勇軍は、中共党の八路軍の各部隊に配合されて、工作を始め、また、直接対日戦闘にも参加した。戦闘においては、相当数の戦死者も出した。

日本が敗亡するや、かれらは、中共党の指図により、満州に進出、韓人青年たちを朝鮮義勇軍の傘下に糾合し、その勢力が一時相当の數に増えたこともある。この中、どれ位の者が北韓へ帰ってきたかは分りようがない。ところで、これらを称して、延安派共産主義者というが、金料事、武亭、崔昌益、韓斌、朴孝三、朴一萬、許貞淑、金昌滿等がその代表的面々である。

このうち、武亭は、6・25動乱の時、謀殺されたし、許貞淑だけが、今生き残っているだけで、残りは全部、濡衣を着せられて肅清されたのである。

IV.

1945年8月15日の解放と同時に訪れた政治的自由の時節において、まっさきに登場した政党は、その年の9月11日、ソウルで発足した、朴憲永を党首とする、朝鮮共産党である。

1928年の12月テーゼ以降、韓人共産主義者たちが、それほど熱望した朝鮮共産党の再建であり、日帝下においても、解放後においても、韓民族の歴史は、いつも、ブルジョア政党よりは一步先んじ、プロレタリア政党が、先に出現する、逆順の歴史であった国内派共産主義者たちが、全て、この再建された朝鮮共産党に参加したことは言うまでもない。

一方、ソ連軍占領下の平壤では、ソ連軍当局の繰りの下に、東北抗日連軍系共産主義者たちと北韓地域の国内派共産主義者たちにより、1945年10月10日から13日の間に、朝鮮共産党北朝鮮分局を発足（今日、朝鮮労働党の創党記念日が10月10日になっている経緯はここにある）させ、ソウルの党中央の朴憲永あてに祝電を打った。朴憲永は、10月23日、北朝鮮分局を承認した。

この時、北朝鮮分局の事実上の中心人物は、今の北韓の金日成であったが、ソ連軍当局は、まだ、かれを、すぐ責任者として押し立てはしなかった。金日成は、その年の12月17日の、第3回拡大執行委員会において、朝鮮共産党北朝鮮分局を北朝鮮共産党と改称すると同時に、初めて、その責任秘書として表面に浮き出ながら、ソウルの中央党からの独立を期したのである。

解放の年の、晩秋から初冬にかけて、平壤に到着した延安派共産主義者たちは、1946年3月30日、別途に朝鮮新民党を発足させ、北韓各道に組織造りを展開した。そして、ソウルに人をつかわし、7月には、南新民党を発足させた。南北新民朝鮮党の政綱、政策はもちろん、共産党のそれと

大同小異のものであり、従って、南北にはそれぞれ二つずつの共産党が出現したわけである。これは、一国一党を指向する共産党としては、ありえないことである。それで、まず、北朝鮮共産党は朝鮮新民党と合党することにより、その年の8月、北朝鮮労働党として出帆した。一方ソウルの朝鮮共産党は南朝鮮新民党と、そして、当面の路線が似通っていた朝鮮人民党と合党することにより、同年11月、南朝鮮労働党として出帆した。これにより、南北には、まず、各々一つずつの労働党という名の共産党が存在することとなったのであるが、これは、ソ連軍が、かれらの利益代弁者として押し立てた金日成に、独立した共産党を手中にさせようとしたその計画においてまずは、一大前進を見たのであった。この時、北朝鮮労働党には、ソ連軍が、北韓に、共産政権を打ちたてるため、ソ連から呼び入れてきた、多数の2世韓人も加担したのであった。

事実、ソ連当局は、初めから、北韓に、独立した共産党と、独立した政権をたてるのが目的であった。自分たちのフトコロの中で養育して連れてきた東北抗日連軍系共産主義者たちを主軸とする方針であった。

しかし、一握りの、その勢力では、それは、到底不可能であった。それがため、まず、国内派共産主義者たちと合作させるしかなかった。このような企みのため、初めは、致し方なく、朝鮮共産党北朝鮮分局として出発させる以外手がなかったのである。次の段階として、南北共産党を分離独立させるため、延安派共産主義者たちをして、別途に共産党を組織させ、統合の必要性を作るようにすることであった。延安派が、ソ連軍政下で、朝鮮新民党という一つの共産党を組織することができたのは、ソ連軍当局の許可とか、そそのかしなしには不可能なことであった。南韓にも、同じような必要性を造成させるため、南朝鮮新民党を組織するように計ったのはもちろんである。

南北新民党が、それぞれ、発足して、わずか4、5ヵ月の後、南北共産党に統合されてしまったのを見ても、この間の事情は推察して余りある。

ソ連の韓半島政策は、ソ連軍が、1946年2月に、既に、金日成を委員長とした北朝鮮臨時人民委員会という名の、金日成政権をつくりあげたことに、歴然と現われている。

韓半島共産化の基地として、北韓を掌握して置こうとのソ連の計画は、国連総会が、南北韓総選挙による、統一独立政府の樹立を決定した時、金日成をして、それを拒否するようにしたことに、より明白に露呈されたのであった。

ところで、このような措置によって、初めて、ソ連の計略がその顔ののぞかせたのではない。実は、ソ連が、北韓を占領して、わずか2ヵ月目に、本名金聖柱、通名金一星という無名の青年を「金日成將軍」に偽装、登場させて大々的な歓迎大会を催すようにした時、既に、その計略は確固不動の実践段階に突き進んでいたのであった。

南北総選挙案に対する北韓側の拒否により、南韓だけの選挙が実施され、1948年8月15日、大韓民国政府が樹立された。9月9日に、北韓では、待っていたとばかり、既に設立されていた金日成政権を公式化させた。

これに先立ち、南朝鮮労働党の大部分の指導幹部と活動分子は、1947年と48年に、既に、平壤へとぶか、地下に深く潜っていた。革命事業の遂行との名分による、犯罪行為に対する広範囲の検挙と逮捕令の発動のため、金日成政権への参与のためであった。朴憲永を初めとした南朝鮮労働党の最高幹部たちが、金日成を首班とするその政権に、補助者として参与したのは序うまでもない。

幾筋もの共産主義者たちを、総網羅した政権の首班に上った、金日成の、次の目的は南北韓の共産統一であった。これがための先決問題は、南北労働党の統合であった。

1949年6月30日、平壤で行われた北朝鮮労働党と南朝鮮労働党の合併と、それともなう朝鮮労働党の誕生は、南朝鮮労働党の大方の幹部たちが平壤に集結しており、また、金日成政権に参加していたという事実から見ると、それは形式的な手続に過ぎなかったと見ることもできる。

しかし、他の観点から見れば、北朝鮮労働党時代には、わざと第2人者の位置にあった金日成が、朝鮮労働党に至り、遂に、委員長として登場したという事実は、ソ連の長期的工作が、初めて実を結んだという意味もあるが、これをもって、金日成は、遂に、南韓の党員たちにまで、党首としての権限を行使することができるようになったということに、より現実的な意味があった。

一方、ソウルには、南朝鮮労働党の地下党が残っており、その指導幹部の金三龍と李舟河が逮捕された1950年3月までは、組織の脈が生きており、たとえ、組織は破壊されたとしても、四方へ散った党員は多かった。

しかし、このような意味よりも、より決定的意味は、朝鮮労働党という単一的共産党の誕生が、ソ連と金日成に、韓半島共産化工作のための、統一した、党的、組織的担保を確保できるようにしたところにあった。朝鮮労働党が発足した日が、南韓から、米軍が撤収を完了したすぐ翌日であったという事実も意味深長であり、より意味深いことは、それが、南侵戦争準備の進行と併行して行われたという事実である。

V.

紆余曲折に充ちた韓国共産主義運動の水派が、朝鮮労働党に至り、金日成を頂点とする組織に整備された時、それは過去の運動の歴史を総括する里程碑であったのではなく、将来の目標に向かって突進するための、動員体制の出発であった。

朝鮮労働党の前に横たわっている目標は、もちろん、共産統一であった。それは、ソ連の世界戦略の一環であり、金日成に与えられた当面の課題の最初の関門であった。かれらは、1950年6月25日の南侵戦争により、その関門を突破せんとして失敗した。ところで、惨酷な戦火の灰の上に転がる数知れぬ屍身のなかに、意外にも、金日成により謀殺された、朝鮮労働党の中で強大な権力を握

っていた、指導幹部たちが混っていた。戦争の失敗に対する補償としての、金日成の勝利は、実に、同志たちの除去にあったのである。かれは、これにとどまらず、敗戦の責任を転嫁することにより、もっと多数の方のある指導幹部を除去することもできたのである。朝鮮労働党の発足が韓人共産主義運動の総括となり得なかったことをかれは、南侵戦争を通じ、総括でない、清算に代替することに成功したのであった。

従って、金日成の朝鮮労働党において、6.25南侵戦争の重要な意味は韓人共産運動の真の歴史を戦火の灰のなかに埋めてしまってもかまわないというところにあった。これは、同時に、金日成によって創始され、専ら、かれによって領導されるという、新たな韓人共産主義運動の歴史というものを探査する神話創造作業の出発でもあった。1952年4月という時点で、朝鮮労働党が、初めて内外に、大々的に公式発表した金日成の、偽造された革命経歴というものの歴史の意味は、まさに、ここから探ることができるのである。

朝鮮労働党の革命的歴史偽造作業は、金日成の偽造された革命経歴を主軸にして、それを韓族の近代史へと拡散させる作業に連繫された。これが、1958年9月、朝鮮労働党によって発刊された、朝鮮民族解放闘争史という、偽造された韓族の近代史であり、かつ、偽造された韓人共産主義運動史であるのである。

歴史の進行を、このように深層分析して見る時、6.25動乱という韓族の五千年の歴史における、最大の悲劇が、実は、金日成には、最大の幸運であったという事実が浮かび上がる。民族の悲劇と金日成の幸運の根が同じであるというこの事実のなかに、これから、この民族が、どのように、歴史と対決して行かなければならないかという問題がかくされているのである。次の表は6.25動乱の時の人命被害をあらわしたものである。

〈軍人命被害〉

	戦死	負傷	失踪	捕虜	計	総計
韓国軍	149,005	717,083	132,256	9,634	1,007,978	1,167,719
北韓共軍	36,837	115,083	1,564	6,267	159,741	
北中	294,000	226,000		112,000	632,000	1,563,000
中	184,000	716,000		31,000	931,000	

〈民間人命被害〉

	死亡	虐殺	負傷	拉致	行方不明	総計
韓北	244,663	128,936	229,625	84,532	303,212	990,968
北	406,000		1,594,000		680,000	2,680,000

南北をあわせ、軍人は各1,167,719名と1,563,000名(計2,730,719名)、民間人は各990,968名と2,680,000名(計3,670,968名)、以上総計6,401,687名という驚くべき人命被害の悲劇を経、加えて、金日成の永久執権への条件構築と韓族の歴史創造のスタートが始まったことは、余りにも苛酷

な運命であり、余りにも苛酷な試練であった。

共産主義革命の完遂（即ち、共産統一の成就）のために致し方ないことであったと金日成と朝鮮労働党は言うだろうが、それが成功しなかったとしてでなく、成功したとしても、それこそ、極左盲動冒険主義路線の極致であり、また、人民のための革命ではなく、個人の権力のための暴動であったという歴史的評価だけは免れなかったであろう。

北韓における歴史の偽造作業は、1958年発行された書籍で終わったのではなく、それは、突に、大々的捏造のための一つの蓄作に過ぎず、かれらの、歴史の偽造作業は、年を追って、より大胆に、より精巧に、より荘厳になったのである。金日成個人だけでなく、かれの先代らも、唯一無二の歴史の主人公として登場した。同時に、その歴史の偽造に障りとなるような人物は、順を追って、粛清された。歴史は、常に、因果の法則に従うものであるがため、このような 粛清→歴史偽造→粛清→歴史偽造の悪循環は、つまるところ、その全てを隠蔽することの出来る、頼りになる担保を必要としたが、朝鮮労働党は、これを、権力世襲への道で探さずしかなかったのである。ところで、この権力世襲への道に、また、必要とするものがあつたが、それは、権力の世襲を合理化する歴史的後押し構築であった。

1970年代に入ってから朝鮮労働党の、もう一回の、大々的な歴史の偽造作業は、即ち、これに対する答えであった。1980年10月の、朝鮮労働党第6回党大会において、金日成親子世襲体制を公式化した朝鮮労働党が、1981年1982年にかけて完成、発行した朝鮮全史の近代篇と現代篇は、まさしく、かれらの権力世襲を歴史的に後押しするために、偽造された現代図書の今までのうちの最も荘厳なる決定版である。原始時代から始まり、1980年現在に連なる5千年間の全史において、1860年代から1945年の解放に至るまでの、80余年間の歴史が、全体の分量3分の1を占め、その3分の1のうち4分の3は、金日成とその一家の歴史でうずめられている。再言すれば、韓民族の最も険難だった時代の歴史が、すべて、金日成一家の歴史で綴られているのである。このような、途方もなく、偽造された歴史の上に、一共産党の権力の正当性が築かれたという事実は、世界で、その類例のないことである。

VI.

以上、韓人共産主義運動の歴史を概観したが、ここで、その歴史のなかで、その運動の特質を、再び、要約すれば、次のように結論づけることができるであろう。

第1、日帝の圧迫のなかで、解放と独立を渴望した韓人たちであったがため、ソ連の弱小民族解放のスローガンに魅了され、アジア地域最初の共産党組織を造りだしたのが、韓人共産主義者運動

である。

第2、しかし、ソ連より、最初の背信に接したのも韓人共産主義運動である。この背信は、コミンテルンの1928年の12月テーゼによる朝鮮共産党の承認取消に連なり、解放後には、韓人共産主義運動の正統の流れとは無関係の、金日成一党に、党の権力を預けるという背信行為に連なった。

同時に、それは、6・25動乱という、悲惨な戦争まで起こす悲劇にまで連なることになり、ソ連は、韓民族と韓人共産主義運動に対して、終始一貫して、背信行為をくりかえしたのである。

第3、韓人の共産主義運動は、理論に対する学習や研究が行われ得るような余裕がなく、直ちに、行動に移されるという過程を踏んだがため、共産主義に関する著述はもとより、論文一つ出たものがない。そればかりか、韓人自らが提起したテーゼ一つない。

このような状況は、現在の北韓においても、全く、同様である。かれらは、思想、理論面において、いわゆる、マルクス—レーニン主義書庫に残し得る論文一本生産し得ないでいるのである。

第4、前述したような事情の当然の帰結として、共産主義を、単なる、行動のスローガンとして受け入れる結果を生んだ。それも、極めて感情的な行動のスローガンであった。

第5、頭が空っぽの上に、感情的行動のスローガンにだけ落ち入ることにより、いわゆる、革命運動は、自然、極左盲動へ流れるしかなかった。殊に、治安が行き届かなかった満州の韓人社会において、このような傾向が強かった。このような傾向は、1933年以降、中共の満州組織が抗日軍事路線を取るや、より一層悪化した。抗日と革命の美名の下に、殺人、拉致、放火、強奪等の匪賊的行為がほしきままに行われたのであった。

第6、1920年代後半と1930年代の、前述のような噴かましい風潮と行為がはびこっていた状況のなかで成長し、また、その行為の一員であった金日成のような盲動分子が、韓人共産主義運動の正統を押しつけ、解放されたこの国の共産党の首領となることができたこと、これまた、他に類例のない特質である。朝鮮労働党は、韓人共産主義運動の最悪の遺伝因子による党であり、その党首の金日成は、最も劣悪な資質の人物である。

第7、このような悪の歴史を善の歴史へと改訂するための契機が、6・25動乱であった。金日成とその党は、6・25動乱を通じ、過去30年間の共産主義運動の真の姿を無へと清算し、新たな共産主義運動の歴史を創作した。民族の悲劇が、金日成一党の幸運と源を一つにするという、酸然なる事実が生まれたのである。かれらは、このような事実すべてを、最後まで隠し、かれらの偽造された正統性を最後まで守るため、世襲執権態勢まで確立して置いたのである。

第8、従って、これら全ての悪の特質を清算し、民族の幸運を開拓して行くためには、金日成親子体制が清算されなければならない。これによってだけ、南北間の対話と交流の時代が訪れることができる。対話と交流があつてこそ、勝共思想を伝播することができる。北韓人民の、悪質な共産思想に染まっている体質を改革するための、勝共思想の伝播の道が開かれる時、初めて、韓半島に、勝共統一の朝がくる。

アジアの歴史は、韓半島を支配する者がアジアを支配してきたことを見せつけてくれる。この韓半島を、共産主義に支配させるか、勝共主義により支配するようにするか、われわれ全てが、アジアに、勝共楽園の実現を知らせ告げる新しい朝の到来を待ちこがれている。これがため、われわれは、まず、金日成父子体制の清算から、勝共運動の標的にしなければならない。

〈参考文献〉

拙著「在満韓人共産主義運動研究」(ソウル:成均館大学出版部, 1975)

◆「権力の歴史—朝鮮労働党と近代史」(ソウル, 成均館大学出版部, 1983)

拙稿「共産主義運動の伝播過程」(ソウル, アカデミー論叢第10集『東西思想の出会いと韓国』掲載, 世界平和教授アカデミー, 1982)

◆「南北韓対話交流不通の基本原因」(アジア学報第17集掲載, ソウル, アジア学術研究会, 1983)

◆「日帝下の小作及び労働争議と思想事件に関する研究」(成均館大論文集第32集掲載, ソウル, 成均館大学, 1982)

◆「北韓政治権力の実態と展望」(『広場』1983.4月号掲載, ソウル, 平和教授アカデミー, 1983)

◆「朝鮮労働党の正体」(『統一』1983.10月号掲載, ソウル, 民族統一中央協議会, 1983)



ヤンパンの面

李命英教授に対する コメント



中川 学
(一橋大学 中国経済史)

李先生は「四人の金日成」という日本語にも訳された著作で一部の日本の識者には知られておりますが、今日お話しになりました韓国における共産主義運動の歴史については、ほとんど知られていないと思います。また日本だけでなく、世界の共産主義運動史研究者を調べてみましたが、例え、アメリカにおいて今一番主導的な共産主義運動史の研究者の代表であるハーバード大学のベンジャミン・シュオルツ教授の著作にも出ていません。それから主としてイギリスで活動しているスチュアート・シュラム教授の著作にも出ていないのです。ですから、私達は、この会議において非常に貴重な事実を教えていただいたということでありまして、まず最初にこの事について深く感謝申し上げたいと思います。

本会議が済州島において開催されたという事を考えてみますと、私は日本人として胸の痛む思いにかられるのでございます。もちろん戦争中の事は言うまでもありませんけれども、1948年の二月に国連が南北の韓国の総選挙によって統一独立政府を樹立しようという採択をしたのですが、これに対して、ソ連が後押しをして、四人目の金日成を支持し、国連のその案を拒否したところから、南だけの独立選挙ということになりまして、それに抗議する運動が、この済州島において激しく行なわれ、四・三のあの痛ましい出来事から一年間あまりに八万人もの、島民の三分の一の方々が亡くなるという悲劇を起してしまったのです。その一番深い原因は、やはり日本の誤った支配にあったということを考えます時に、追悼の祈りにかえてこのコメントをさせていただきたいと思っている次第であります。

昨日、李相憲院長が、言われましたように、確かに狭い民族主義に囚われることは良くありませんし、私達はこれを越えて、グローバルな平和を真に構築する為に努力してゆくわけですが、しかし、やはり歴史の事実に関しては、これを直視するという勇氣を持たなければならないと思います。ただいま李先生が、御指摘されましたように北韓は歴史を改ざんし、捏造し、その果てに何と朝鮮歴史全体を書き換えてしまっております。この報告書にも書かれていますが、とにか